

大阪市における南海地震石碑と教訓の継承

Nankai Earthquake Memorial and Handing Down Lessons in Osaka City

長尾武

Takeshi Nagao

大阪市阿倍野区天王寺町南3-8-9

There are four memorials to the Ansei Nankai earthquake in Osaka City. Two of them, the Ohjishin(Daijishin)-Ryokawaguchi-Tsunamiki and the memorial in Shitennoji, are inscribed with the disaster's lessons. However, we do not know of any memorials to the Hoei earthquake in Osaka, although an Ansei-period "news" story briefly mentions a "Jizou" ("Ksitigarbha") statue being built. I believe the "Jizou" was built at the mouth of the Kizu River where the Ohjishin-Ryokawaguchi-Tsunamiki was later built. Since that memorial's construction, it has been regularly maintained, and ceremonies are held as if it were a "Jizou" that has been keeping residents safe for about 160 years.

Keywords : *Hoei, Ansei, earthquake, tsunami, memorial, lesson, Osaka City*

1. はじめに

南海トラフを震源域とする大地震とそれに伴う大津波が江戸時代の大坂に2度も大きな被害を与えた。宝永四年(1707年)に起こった宝永地震と安政元年(1854年)に起こった安政東海・南海地震である。安政の地震による犠牲者の供養石碑は、大阪市内に4基が現存している。その中、2基には地震と津波の状況と教訓が記されている。JR大正駅の北東約300m、木津川に架かる大正橋の東詰北側に、『大地震両川口津浪記石碑』がある。何時訪れても、地元の人々によってきれいに清掃され、花立てには新しい花が供えられている。建碑以来、約160年間、地域の人々によって守られてきたのである。教訓を刻んだ碑文の最後に、「願くは、心あらん人、年々文字よみ安きよう墨を入れ給ふへし」とあるが、毎年、地藏盆には墨入れが行われて、先人の思いが受け継がれているのである¹⁾。2007年に大阪市指定有形文化財に指定された。

もう一つは、四天王寺・元三大師堂の門前広場の無縁墓群中にある供養石塔である。この石碑には、「海鳴、潮の干満乱れし時は、早く津波の兆しと知りて、難を逃れたまふべし」との警告が刻まれている。また、安政南海地震による津波が襲った前日に大阪で海鳴や潮の干満の乱れがあったと記録されている唯一の史料であり、東海地震による影響と考えられ、たいへん貴重な記録を伝えている。この石碑は建立当時にはよく知られていたが、その後、無縁墓中に置かれて、その存在を忘れられてしまっていた。碑文について、筆者は過去に2つの論文で紹介したが^{2) 3)}、石碑に近づけないために、全文の正確な判読が出来なかった。2012年秋、NHKと大阪市教育委員会によって調査が行われ、翌年、大阪市顕彰史跡に指定された。本稿の最後に最新の判読文を紹介する(史料1)。

教訓が刻まれていない供養石碑には、生野区舍利尊勝寺門前の供養石塔がある。また、此花区西島、新淀川堤防下にある明治四十年(1907)建立の常吉新田開発地主の墓にも安政年間海嘯溺死者を供養するという文字が刻まれていて、安政南海地震と津波の供養石碑とされている⁴⁾。大阪市内に現存する江戸時代の地震石碑は全て安政東海・南海地震に関するものである。

ところで、宝永地震に関する供養石碑の存在は全く知られていない。筆者は最近、安政東海・南海地震関係の史料中に、宝永地震の犠牲者を供養する石地藏が建立されたことを記述しているのに気付いた。本稿で

は、先ず、『宝永地震の石地蔵』は何処にあったのかを考察し、次に、宝永地震の 147 年後、安政東海・南海地震で被災した人々が『大地震両川口津浪記石碑』を建立したことについて述べる。この時には犠牲者の供養だけでなく、教訓を石碑に刻んだのであった。近代以後の変貌が激しかった大阪市で、『大地震両川口津浪記石碑』が建碑以来、3 回も移転されながらも、約 160 年間、住民（現・浪速区幸町 3 丁目）によって守られてきた歴史を史料によって紹介する。最後に、過去の災害教訓を生かすとともに、現代大阪市の地形などの変化に対応した被害想定必要性について述べる。

2. 宝永地震の石地蔵

(1) 史料中に見える宝永地震の石地蔵

安政東海・南海地震の 147 年前、宝永四年（1707 年）に、宝永地震と津波が大坂に大被害を与えたが、これに関する供養石碑の存在は知られていない。宝永地震では安政の地震による死者をはるかに上回る犠牲者があった。そのため、供養石碑が建てられたと思われるが、現在では全く残存していないのである。

宝永地震関係の石碑は現存しないが、建立されたことを記す史料がある。安政東海・南海地震関係の史料、『地震道中記』は、宝永地震の犠牲者を供養する石地蔵が建立されたことを記述している。「此津浪（安政の津波）之時に味川口（安治川口）に其丈二丈余の石地蔵の形なる化物あらはれ出て頻に浪を逆立て多の人を殺せしとぞ、是は宝永四年亥の十月四日の大地震津浪にて大坂の人多く死したる其菩提の為に石地蔵を立たるが、其亡霊友よひせんとて現れ出て多くの人を殺せるなるべし」⁵⁾ この話の中で、石地蔵の形をした化け物が現れたということは、もちろん作り話である。しかし、犠牲者を供養するため石地蔵が建立されたということは真実と思われる。川の畔に建てられていた石地蔵が津波による浸水であたかも川の中から現れたように見えたことから、このような話が語られたと考えられる。

(2) 宝永地震の石地蔵は何処に建てられていたか

宝永地震後、石地蔵が建立されたことは確かな事実であろう。それでは、この石地蔵は何処に建てられたのだろうか。前述の話では安治川口となるだろう。しかしながら、安治川口より木津川口の方こそ供養石碑が建てられた可能性が大きい。その理由は 4 つあげられる。第 1 に、『大坂大津浪図』によれば、安政南海地震で木津川口付近は津波による浸水地域が広がっていた（図 1）。他方の安治川口周辺は浸水していない。安政の津波で、川の中から石地蔵が現れたように見えたのは、木津川口でこそ起こったであろう。第 2 に、木津川口から侵入した津波による落橋などの被害が安治川口から入った津波によるそれらより大きかった⁶⁾。第 3 に、安政南海地震後、犠牲者を供養する『大地震両川口津浪記石碑』が木津川の畔・幸町（現・浪速区幸町）に建てられた。安治川口にはこのような供養石碑は建てられていない。第 4 に、『大地震両川口津浪記石碑』は、地元・幸町の人々から「お地蔵さん」と呼ばれていることである。筆者は、この石碑を調査し始めた

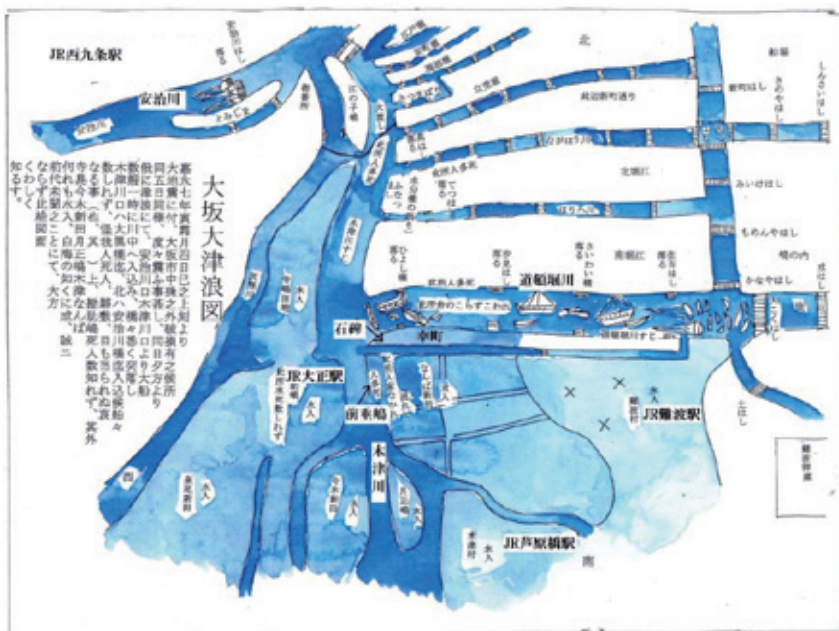


図 1 大坂大津浪図（大阪城天守閣蔵）の模写。原図は南が上に描かれているが、本図では、北を上にした。河川と浸水地域は着色されている。大地震両川口津浪記石碑の位置と現在の JR の駅の位置を加筆した。

頃、地元の人々が「お地藏さん」と呼んでいるのを不思議に思った。毎年、地藏盆に供養を行っているからだろうと思って納得していた。しかし、上記の物語を読んで、その謎が解けたのである。木津川口に犠牲者を供養する石地藏が建てられた可能性は大きいと考えるのである。

木津川口にも、似た話がある。『大地震大津浪末代漸迺種』⁷⁾に、「大津波突来る前に大坂の西前垂嶋といふ処へ丈け二丈ばかりの高坊主出たり。人々是を見て膽を潰しアレヨアレヨといふうち海に入陸に向ひ手にて水をかける如くして姿見へず成と間もなく大津浪突来る。」とある。これに登場するのは高坊主で、石地藏では無いが、これら二つの風貌は似ており、話の筋もたいへんよく似ている。高坊主が現れたという前垂嶋（現・浪速区木津川1丁目付近）は、『大地震両川口津浪記石碑』が建てられた幸町5丁目の渡し場のすぐ南に位置していた（図1）。前垂嶋から幸町にかけて、津波によって浸水した。木津川の渡し場付近に石地藏があったとすれば、水に浸かって、半身を現した情景になるのである。以上の理由から、現在、『大地震両川口津浪記石碑』がある場所付近に宝永地震の犠牲者を供養する石地藏があったと考えるのである。

3. 宝永地震の石地藏から『大地震両川口津浪記石碑』の建立へ

(1) 供養碑としての宝永地震の石地藏

宝永地震後に建立された石地藏は、犠牲者への供養が第一の目的であったが、当然、将来の安全に対する願いも込められている。しかし、後世の人々へ教訓を刻んで残すことは無かった。大坂の市街地が上町台地より西へ拡大したのは16世紀末から17世紀初頭のことであって、宝永地震が経験した最初の大地震であったからである。繰り返す災害として強く意識されていなかったと言えるだろう。

(2) 後世への警告としての『大地震両川口津浪記石碑』

宝永地震の大災害が遠い昔の出来事として、大坂の人々から忘れられてしまった頃、突如として安政の東海・南海地震が起こった。『大地震両川口津浪記』は、147年前の宝永地震と津波の被害を思い起こし、次のように述べている。「今から148年前(現代の教え方では147年前)、宝永四年十月四日、大地震の時にも小船に乗って、津波によって溺死した人々が多かったことを聞いている。年月がたてば、そのことを伝え聞く人もほとんど無く、今また、同じ場所で、多くの人々が亡くなった。痛ましいこと限りない。今後もまた、この様なことが起こりうるだろう。」

2度の大災害を経験した大坂の人々は、将来も、このような大災害が繰り返されるだろうと気づいて、後世のために、百年の歳月にも朽ちない石碑に教訓を刻み込んだのであった。しかし、たとえ石碑に刻み込んだとしても、長い年月が経てば、忘れ去られることを見越して、心ある人に、毎年、碑文に墨を入れるように託したのであった。石碑を建立すればそれで完成というのではなく、人から人への教訓の継承こそ大切であることを教えてくれているのである。

(3) 『大地震両川口津浪記石碑』建立についての人々の協力

この石碑建立について、協力した人々の名前が石碑の北面に刻まれている。施主となって資金を提供したのは、津波の被害を受けなかった長堀茂左衛門町の町人・家守であった。幸町の年寄、地主、住民が協力し、用地が提供された。また、西側町（前垂嶋）の町民が大石一本を寄付している。いずれも大被害を被った地域である。地震の揺れを恐れて、川船に避難したため、多くの住民が溺死した。また、大船が舳先を突き入れて、多くの家屋が突き崩されたのである。道頓堀川右岸に位置した幸町1～5丁目では48軒も崩された。西側町では20人が溺死した⁸⁾。大きな被害を受けた町の人々が協力して、災害の8ヶ月後、安政二年七月に石碑が建立された。亡くなった人々への追善供養とともに、後世への教訓を残したのである。その後、現在まで、約160年間、幸町の人々は石碑の維持と供養を行ってきたのである。

4. 『大地震両川口津浪記石碑』に刻まれた教訓

まず、『大地震両川口津浪記石碑』の周囲4面に刻まれた碑文を紹介する。正面（西面）には南無阿彌陀仏の名号と南無妙法蓮華經の題目など、東面と南面には『大地震両川口津浪記』、北面には石碑建立の

施主、協力者などが刻まれている。『大地震両川口津浪記』の判読については、「『大地震両川口津浪記』にみる大阪の津波とその教訓」（京都歴史災害研究 13）ですでに紹介しているので、本稿では口語訳を示す。その後、『大地震両川口津浪記』に記された教訓について要約する。

（1）『大地震両川口津浪記石碑』の碑文

〔正面（西面）〕

天下和順 日月清明
風雨以時 災厲不起
南无阿弥陀佛
南無妙法蓮華經
願以此功德 普及於一切
我等與衆生 皆共成佛道

〔東面と南面〕 『大地震両川口津浪記』 口語訳を示す。
嘉永七年六月一四日子刻頃（同年十一月二七日に安政と改元された。西暦 1854 年 7 月 9 日午前 0 時頃）、大きな地震があった。大坂の町の人々は皆驚いて、大通りや川端にたたずみ、余震を恐れて四・五日、不安な夜を明かした。伊賀（三重県）、大和（奈良県）では、けが人が多いということだ。〔以上、第 1 段落〕

同じ年、十一月四日辰刻（12 月 23 日午前 8 時頃）大地震が起こった。以前から恐れて、空き地に小屋を造ったり、老人も子供も、多くの人々が小舟に乗っていた。翌五日申刻（12 月 24 日午後 4 時頃）、大地震が起こった。家が崩れ、出火もあり、恐ろしい様子であった。それらがようやく治まった日暮れ頃、雷のような響きとともに、海辺一帯に津波が押し寄せた。安治川はもちろん、木津川は特に激しく、山のような大波が立ち、東横堀川まで泥水が四尺（約 120cm）ばかり流れ込んだ。両川筋（安治川、木津川）に碇泊していた大小の船は碇綱をうち切られて、一瞬の間に川上へ遡り、その勢いで、安治川橋、亀井橋、高橋、水分、黒金、日吉、汐見、幸、住吉、金屋橋など、ことごとく崩れ落ちてしまった。また、大道にあふれた水に、あわてて、逃げ迷い、橋から落ちる人もあった。大黒橋では大きな船が横倒しになって、塞いでしまったので、川下から入ってきた船は小舟を下敷きにして、次々に乗り上げてしまった。大黒橋より西（道頓堀川筋）、松ヶ鼻の南北（木津川筋）一帯は、少しの間に、船で山のようになって、その多くが破船していた。川岸の掛けづくりの納屋などを、大船が押し崩し、その物音や、人々の叫び声が響きわたったが、急変で、助けることもできなかった。わずかの時間のうちに、夥しい水死者、けが人がでた。船場や島之内までも津波が来るという噂も流れ、上町へあわてて逃げて行く人々も見られた。〔以上、第 2 段落〕

今から 148 年前（現代の数え方では 147 年前）、宝永四年十月四日（1707 年 10 月 28 日）、大地震の時にも小舟に乗って、津波によって溺死した人々が多かったことを聞いている。年月がたてば、そのことを伝え聞く人もほとんど無く、今また、同じ場所で、多くの人々が亡くなった。痛ましいこと限りない。今後もまた、この様なことが起こりうるだろう。〔以上、第 3 段落〕

大地震が起こったときは、いつも津波が来ると思って、絶対に船に乗ってはならない。また、家が崩れて、火災も発生するだろう。お金や証書類は蔵へ入れて保管し、火の用心が大切である。さて、川で碇泊している船は、大きさに応じて、水勢の穏やかな所を選んで、繋ぎかえ、また、囲い船（北前船のように、冬期航海できず、休んで、修理などされている船）は、できるだけ早く、高い場所まで引き上げて、用心すべきである。津波というものは、沖から押し寄せるだけでなく、海岸に近い海底や、川底などでも、吹き涌くことがある。あるいは、海辺の新田畑で泥水が大量に吹き上がることもある。今度、大和の古市（現在の奈良市古市町）で、池の水があふれ、多くの人家が流されたのも、この類である（津波による災害としているが、地震による地盤の液状化現象である。ただし、奈良の古市での災害は六月一四に起こった伊賀上野地震によるものである。）。海辺、大川、大池の近くに住む人は用心しなさい。津波が平常の高潮と違うことを、今回被災した人々はよく知っているが、後の人々の心得のため、また溺死した人々の追善供養のため、ありのまま拙文にて記しておきます。どうか、心ある人は、文字が読みやすいように、毎年、碑文に墨を入



写真 1 大地震両川口津浪記石碑（正面を撮影した。）

正面の花立 1 対、線香立、石碑の周囲の石板は明治 34 年（1901）に設置された。2 基の灯籠と玉垣は昭和 49 年（1974）に設置された。

てください。

[以上、第4段落]

[北面]

安政二乙卯年 七月建之

施主 長堀茂左衛門町

丁人中

家守中

発起 森

補助 幸町五丁目

年寄 播磨屋忠四郎

地主 播磨屋重蔵

大石取次 淡路屋喜右衛門

大石一本 西側町丁中

(2) 『大地震両川口津浪記石碑』に刻まれた教訓

『大地震両川口津浪記』は長文であるが、その内容は大きく分けて4つの段落に区分される。第1の段落は、嘉永七年（安政元年）六月十四日深夜から十五日未明にかけて起こった伊賀上野地震について記述している。第2の段落では、同年十一月四日、安政東海地震が起こったこと、また、その約32時間後の翌五日、南海地震が続いて起こったことが記述されている。特に津波による恐ろしい情景がリアルに記述されている。第3の段落では、148年前（現在の数え方では147年前）の宝永地震の記憶が語られている。そして最後の第4段落では、後世の人々への警告として、地震や津波についての心得・教訓が示されている。そして、「願くば心あらん人、年々文字読みやすきやう墨を入給うへし」と結んでいる。ここでは、5つの教訓が採り上げられているが、①～⑤の箇条書きで示す。

- ① 「大地震が起こったときは、いつも津波が来ると思って、絶対に船に乗ってはならない。」
- ② 「火の用心が大切である。」防火の夜回りは治安の維持も兼ねていた。十一月四日、大坂町奉行所は惣年寄を通じて、大坂の人々に、火の元に注意し、町内の見回りを裏借家に至るまで、入念に行うよう命じた⁹⁾。安政東海・南海両地震の際には、火の用心が徹底し、ほとんど出火は無く、また、速やかに消し止められた。
- ③ 「お金や証書類は蔵へ入れて保管する。」
- ④ 「河川に碇泊している船は、水勢の穏やかな所に繋ぎかえる。また、北前船のように、冬期航海できず、休んで、修理などされている船は高い所に引揚げておく。」
- ⑤ 「海辺の新田畑中に泥水あまた吹き上がる。」碑文の筆者は津波による現象として記述しているが、これは地震の揺れによる地盤の液状化現象である。江戸時代、大阪湾岸の新田地帯は市街地から離れた田園地帯であって、人家も少なく、大きな人的被害はなかった。しかし、碑文はこの地盤の液状化現象にも注目し、「海辺、大川、大池の辺に住人用心有へし。」と警告している。

『大地震両川口津浪記』から読み取れる教訓は以上である。当時の大阪の人々は、ひんぱんに起こっていた火災に対しては、防火に努めた結果、大地震の際に大火になるのを防ぐことができたのである。しかし、津波については「前代未聞」の災害であった（実際には宝永地震があったが、ほとんどの人々は知らなかった）。大地震の際、揺れを恐れて、多数の人々が川船に逃れるような行動をとり、津波によって甚大な犠牲者を出したのであった。

5. 『大地震両川口津浪記石碑』の維持と教訓の継承

(1) 住民による石碑の維持と啓発活動

石碑の建立当時から幸町に居住されている増井健蔵氏宅に、住民が石碑維持に深く関わってきた記録が伝えられている。この史料を参照し、住民がお金を出し合って、石碑を維持し供養してきた歴史を示す。

1. 安政の地震・津波災害から47年後の明治三四年（1901）八月、石碑の正面に線香立と花立一對、そして石碑の周囲を囲む石板が付け加えられた。この時、幸町五丁目の人々（寄附者は必ずしも幸町五丁目の住人

とは限らない) 124名から、金 44 円 85 銭が寄附されている。費用は 36 円 43 銭、残金は 8 円 42 銭であった。(『明治三四歳第八月 記念碑寄附人名簿』、『明治三四歳第九月 記念碑修繕費用』より)

津波の 50 回忌を前にして、石碑の周囲の環境を整備したのである。

※筆者は『水都大阪を襲った津波』2012 年改訂版、及び、「『大地震両川口津浪記』にみる大阪の津波とその教訓」(京都歴史災害研究 13)で、明治二四年(1891)の出来事としていたが、本稿で記述しているように、明治三四年(1901)が正しい。ここに訂正し、お詫びいたします。

2. 明治三六年(1903)九月二四日(彼岸中日)に津波の五十年忌の供養が盛大に行われた。場所について、「幸町渡場北に入東側空地」とある。四ヶ寺※から僧侶等 27 名が来訪し、石碑前で回向が行われた。この費用 94 円 55 銭は幸町有志 143 名の寄付によった。発起人として、淡路清兵衛、増井卯兵衛、須賀忠四郎、田中菊次郎、畑田伊助の 5 名の名前があり、増井卯兵衛は会計を担当し、帳簿を記録したことから増井家に史料が伝えられているのである。尚、帳簿の筆記は増井卯光(卯兵衛の子息)が担当した。須賀忠四郎は石碑建立当時、町年寄であった播磨屋忠四郎かもしれない。淡路清兵衛は大石の取り次ぎをした淡路屋喜右衛門の親族であろう。災害を直接経験した人はほとんど存命でなかったと考えられるが、住民の大部分は両親や地域の人から聞いて知っていたであろう。明治 34・36 年と続いた 50 回忌関係の多額の費用が多くの人々からの寄附によって賄われた(『大津浪五十念忌 寄付金人名簿』、『大津浪五十念忌入費帳』より)。

※四ヶ寺とは、大谷派光徳寺、知恩院派浄土宗宗圓寺、法華宗本行寺、真言宗龍山院堀内である。

3. 大正四年(1915)、木津川に大正橋が架けられ、幸町の渡し場にあった石碑は大正橋の東詰へ移転されたが、同年八月に供養が行われた。石碑の移転と再建、さらに供養に要した費用 38 円 91 銭は全て幸町の有志 91 名(借家 6 軒と記載されて名前の記入が無かったものについて、6 名とした)による寄附金 40 円 95 銭によったのである。費用の内訳の例を示せば、石碑の解体と移送の祝儀として 1 円 50 銭、石碑の再建に 10 円であった。(『大正四年八月二四日 津浪寶塔婆 供養寄附人名』、『大正四年八月二三日 津浪記念買入簿』より)

4. 昭和四九年(1974)に道路拡張がおこなわれ、新大正橋に架け替えられた際、石碑が移転されたが、幸町の人々 86 名の寄付によって、新たに玉垣、石灯籠が設置され、植樹も行われて街園として整備された。また、『大地震両川口津浪記』の文章はくずし字で書かれており、現代人にとって難解であることから、内容を分かりやすく解説した案内板が設置された。ケヤキの一枚板の表面に『大地震両川口津浪記』を、裏面に賛同者の氏名が書かれている¹⁰⁾。

石碑建立から約 120 年、石碑と周囲の環境整備が行われただけでなく、碑文を解説した案内板が設置された。これは大阪市民への啓発活動としてとても重要な役割を果たしている。

5. 平成十六年(2004)の秋から、西大阪高速鉄道に関連する工事が始まり、石碑や案内板は一時的に大正橋の東詰、北 30m の場所に移転された。2006 年春、工事が終了し、また元の、大正橋の東詰・北側の位置に戻された。その際、ケヤキの解説板は変色し、文字が読みづらくなっていたことから、板の表面を削り、文字を彫り込んで、墨を入れ、一新された。石碑にも墨が入れられ、新しくなった解説板と共に元の場所に戻され、四月十二日、開眼法要が営まれた。2007 年 3 月 28 日、幸町三丁目西振興町会と大地震両川口津浪記念碑保存運営委員会によって、『大地震両川口津浪記』記念誌が刊行された。これには住民からの寄稿、石碑をめぐる思い出の写真、過去の新聞記事などが集められている。

建碑以来、大阪市街地の発展による石碑の移転、住民の移動など、いくつもの危機をくぐり抜けて、約 160 年、幸町五丁目(現在は幸町三丁目西振興町会)の住民が中心となってこの碑を守り、お金を出し合って維持してきたのである。平成十九年(2007)四月七日、『大地震両川口津浪記石碑』は大阪市指定有形文化財に指定された。以来、石碑は大阪市のみならず、全国的にも、いっそう注目されるようになってきた。碑文内容の優れていることは言うまでもないが、この石碑の最も注目すべきは、建碑以来、住民の手で守られ、供養が行われてきたということであろう。

宝永地震後に建立された石地藏は、どうなったのだろうか。安政の津波で流失したのだろうか。その後、再建されることも無かった。しかし、現在も、地元の人々は『大地震両川口津浪記石碑』のことを、「お地藏さん」と呼んでいて、その存在が伝えられているのである。『大地震両川口津浪記石碑』は安政南海地震後に建立されたのであるが、147 年前に起こった宝永地震の記憶も記され、その犠牲者についても供養し、教訓を伝えているのである。

災害経験者がいない現在も、多くの町民が供養に参加協力しているのは、『大地震両川口津浪記石碑』を幸町の「お地蔵さん」としていることにあると考えられる。大阪に限らず、我が国では、どの町にもいたる所に、「お地蔵さん」があり、大切に維持されてきた。現代では地域の事情によって変化もあるが、幸町では、町内の有志者によって大切に守られている。先人は『大地震両川口津浪記石碑』の維持について、実によく考えた住民の参加方式を思いついたのである。

(2) 教訓を現代にどう生かすか

『大地震両川口津浪記』には、津波の際に最も強調される「高台へ避難せよ」という項目が無いのである。碑文には「船場や島之内までも津波が来るといふ噂も流れ、上町へあわてて逃げて行く人々も見られた。」とあり、津波の来襲で、人々が高台へ避難したことを述べている。しかし、安政の津波では、実際には大阪湾岸の新田地帯で浸水被害が見られたが、大坂市中では一部の地域を除いて、ほとんど浸水しなかった¹¹⁾。宝永地震による津波でさえ、住家が流されるような浸水にはならなかった¹²⁾。川端に近づいたり、船で逃げない限り、津波で溺死することは無かったのである。それで、「高台へ避難せよ」という項目が無いのである。

近代以後、大阪市は地形・社会・経済・生活様式など、大きく変貌した。特に、地盤沈下問題が深刻である。大阪市では1935～1981年の46年間に、地盤の累積沈下量が最大3.0 mにおよぶ地域もある¹³⁾。沈下は現在終息しているが、いったん沈下した地盤は元に戻らないのである。津波に襲われれば、宝永や安政南海地震津波では見られなかった深刻な浸水被害が起きる可能性がある。特に、大阪市域では海拔0m地帯が21km²におよんでいる¹⁴⁾。『大地震両川口津浪記』に記載された警告、「大地震が起こったときは、津波が来ると心得る」を忘れず、高所に避難する必要がある。現代では津波警報が出されるであろうから、耐震性のある鉄筋の3階以上の高所に避難する必要がある。

6. まとめ

大阪市内に現存する安政東海・南海地震石碑の中、教訓が刻まれた2基の石碑について紹介した。四天王寺の石碑については、2012年秋に行われた調査によって、全文が明らかとなり、正確な判読文を示すことができた。『大地震両川口津浪記石碑』は地元、浪速区幸町の人々によって大切に維持され、災害の教訓が伝えられてきた。しかし、宝永地震関係の石碑は現存していない。

『道中記』の石地蔵出現の物語は、作り話であるが、宝永地震後、犠牲者の菩提を弔うため石地蔵が建立されたということは真実と思われる。この石地蔵が建てられていた場所は、木津川口、『大地震両川口津浪記石碑』が建立された場所付近と考えられる。石地蔵は現存しないのであるが、地元・幸町の人々は『大地震両川口津浪記石碑』のことを『お地蔵さん』と呼んでいるのである。安政東海・南海地震後に建てられたこの石碑文には、147年前の宝永地震による被害が回想され、その教訓が生かせなかった悔しさが述べられている。将来も同様の災害が起こるであろうと予測して、後世の人々のために、教訓を石碑に刻み、警告としたのである。

安政二年の建碑以来、大阪の市街地の発展の過程で三度も移転せざるを得なかった。その都度、地元幸町の人々が話し合い、費用を捻出して守ってきた。また、大阪市民に広く教訓を知ってもらうために、碑文の解説を記した案内板を設置し、防災についての啓発活動を住民の手で行ってきたのである。建碑から現在まで約160年、石碑が維持され、教訓が伝えられているのは、ひとえに、幸町の人々が朝に夕に、地域の『お地蔵さん』として、石碑のお世話をされてきたことによるのである。私達は、将来、必ずやって来る南海地震による災害から命と生活を守るために、先人の教訓を生かし、また、現代大阪の地理的・社会的状況の変貌を考慮して、できうるかぎり減災に努める必要があるだろう。

史料1. 四天王寺にある安政南海地震の供養石塔の判読文
〔正面（東面）〕

諸国地震及洪浪

南無阿彌陀佛

水陸横死大菩提

〔南面〕

去年霜月四日五日の地震を遁^{のがれ}ん為^{ため}に小船に乗居^{やからにわか}し輩^{やからにわか}俄^{たちまち}の洪浪湧か如く
木津川口邊の大小^{あまた}数^{あまた}船一時に川上に押寄橋を落し船を推^{おびた}き漂没^{おびた}死人^{おびた}夥^{おびた}し
尤^{もつとも}前日より海鳴潮の干満^{かんまん}乱^{みだ}しを志^しら寿^すして死に至る者^{まこと}寔^{まこと}憐^{あは}むへし 后世^{こうせい}

〔裏面（西面）〕

海鳴潮^{かんまん}の干満^{かんまん}みだれし時は早く津波^{きざし}の兆^{きざし}しと知りて難^{むづか}をのかれ玉^{たま}ふへしと云^い爾^{のみ}
安政二乙卯秋建^き之

〔北面〕

梵語以外何も記載されていない。

※石碑の台座には、石碑建立の発起人として小西八兵衛、世話人として31名の名前が刻まれている。2014年春、大阪市教育委員会と四天王寺によって案内板が設置された。

謝辞

筆者の地震・津波研究の出発点は、大正橋の安政南海地震津波の碑、『大地震両川口津浪記』である。建碑以来約160年にわたり津波の犠牲者を供養し、花を供え、毎年、碑文に墨を入れ、お世話を続けてこられた幸町の人々のおかげである。調査を始めて以来、愛知喜久雄氏、山本善三郎氏、安岡廣氏にはたいへんお世話になりました。特に増井健蔵氏には所蔵される史料の閲覧をさせていただき、増井家の5代にわたる石碑との関わりについてご教示を賜りました。四天王寺の碑文については、2012年秋の調査で全文が明らかとなりました。和宗総本山四天王寺法務部法務課課長兼子鐵秀氏、NHK大阪放送局報道部記者宗像正勇氏、大阪市教育委員会文化財保護担当主任学芸員櫻井久之氏、大阪市史編纂所大阪市史料調査会生駒孝臣氏、内海寧子氏の尽力によるものです。ただし、本稿の判読文については、筆者に全ての責任があります。この拙い研究について、発表の場を与えてくださった立命館大学歴史都市防災論文集編集委員会の諸先生方に深く感謝いたします。英文Abstractについては、Jeremy Larsen氏から援助を賜りました。お世話になりました皆様方に深く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 長尾武：『大地震両川口津浪記』にみる大阪の津波とその教訓，京都歴史災害研究，13，pp.17-26，2012.
- 2) 長尾武：安政南海地震津波（1854年）の犠牲者供養石碑—四天王寺（大阪市）の無縁墓地調査より—，地震，第2輯第63巻第4号，pp.251-253，2011.
- 3) 長尾武：大阪・四天王寺，安政南海地震津波碑文の判読，歴史地震，pp.27,77-84，2012.
- 4) 長尾武：水都大阪を襲った津波—石碑は次の南海地震を警告している—，長尾武，2012.
- 5) 宮貞貞雄編：地震道中記（東京大学地震研究所編，新収日本地震史料，第5巻別巻5-1，日本電気協会，pp.287-298，1986.）
- 6) 今枝直方編：江府京駿雑誌（東京大学地震研究所編，新収日本地震史料，第3巻別巻，日本電気協会，PP.66-70，1983）
- 7) 編者不明：大地震大津浪末代嘶洒種（武者金吉編，日本地震史料，明石書店，pp.426-432，1995復刻，毎日新聞社1951初版.）
- 8) 編者不明：地震海溢考，（東京大学地震研究所編，新収日本地震史料，第5巻別巻5-2，日本電気協会，PP.1512-1517，1987）
- 9) 大阪市参事会：大阪市史，4下，清文堂出版，1965復刻，大阪市役所，1913初版.
- 10) 大阪市浪速区幸町三丁目西振興町会・大地震両川口津浪記念碑保存運営委員会編：『大地震両川口津浪記』記念誌，大阪市浪速区幸町三丁目西振興町会・大地震両川口津浪記念碑保存運営委員会，2007.
- 11) 長尾武：1854年安政南海地震津波，大阪への伝播時間と津波遡上高，歴史地震，23，pp.63-79，2008.
- 12) 長尾武：宝永地震（1707年）による大坂市中での津波遡上高，歴史地震，26，pp.15-18，2011.
- 13) 大阪地盤沈下総合対策協議会：大阪における地盤沈下の概況，1983.
- 14) 大阪府土木部河川室・西大阪治水事務所編：西大阪の高潮対策，大阪府土木部河川室・西大阪治水事務所，2004.